

・ 始良市議会議長 様

 会 派 名 市政クラブ始輝
 代表者氏名 桃木野 幸一

政務活動報告書

【調査・研修・陳情等】

次のとおり実施しましたので報告します。

活動期間	令和 5 年 1 0 月 2 6 日～令和 5 年 1 0 月 2 8 日（2 泊 3 日）		
活動場所	富山県（富山市、氷見市、南砺市、朝日町）		
目的	全国過疎問題シンポジウム 2 0 2 3 への参加		
使途項目	旅費	経路内訳 と金額	様式 3、様式 5 のとおり
所 見	（全体会）基礎講演「過疎地域の使命」 ・ 過疎地域の実態から学ぶ ・ 少数人数での効率的な分業 ・ 過疎地域の果たす使命 過疎地域の価値を高め、また少数社会としての取り組み方についての講話でした。 パネルディスカッション 「多様な人材が創るこれからの地域社会」 4 名のパネリストが事例発表し、コーディネーターとパネリストでの意見交換が行われました。 （交流会）全体会での基礎講演やパネルディスカッションの内容を参加者全員で意見交換した。パネリストの方々へも直接質問ができ有意義な交流会でした。 （分科会）①氷見市 ・ 4 つの町の事例発表 ・ 氷見市の過疎への取り組み（現地視察） ②南砺市 ・ 「衰退する過疎集落の取組と課題」について ・ 空き家、空き店舗再生の事例発表 ・ 世界遺産の合掌造り集落（現地視察）		

	③朝日町 ・「一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために」をテーマとした意見交換 ・観光交流施設ヒスイテラス（現地視察） 詳細は、担当ごとに別紙にて報告します。 成果物、資料は別添のとおり
参加者名	・桃木野 幸一 ・和田 里志 ・湯元 秀誠 ・宇都 陽一郎

様式 4

令和 6 年 3 月 7 日

始良市議会議長 様

会 派 名 市政クラブ始輝
代表者氏名 桃木野 幸一

政務活動報告書

【調査・研修・陳情等】

次のとおり実施しましたので報告します。

活動期間	令和 5 年 10 月 26 日～令和 5 年 10 月 28 日（2 泊 3 日）		
活動場所	先進地調査（富山市、南砺市）		
目 的	全国過疎問題シンポジウム参加及び現地視察、		
使途項目	旅 費	経路内訳 と金額	
所 見	令和 5 年 10 月 26 日（木）～10 月 28 日（土） ・調査事項 - 全国過疎問題シンポジウム参加及び現地視察 ・令和 5 年度過疎地域持続的発展優良事例表彰式の後基調講演「過疎地域の使命」を受講した。 所 見 富山市長が一流の田舎を作っていこうという気持ちで行政を進めていると話された。 早稲田大学宮口教授の講演を聴いた「過疎地域の使命」 ・過疎地域は人口減少を嘆くのではなく、少数の人間が広大な空間と資源を活用する豊かな少数社会をめざすべきでありその事が国への貢献になるとの話が印象に残った。 パネルディスカッションでは、古民家を再生して地方創生に意欲のある外国人を雇い地域が活性化した事例や鉱山宿舎を改築して年間 105 組 257 人が来訪した事例、岩国市では、移動販売に補助をしている事例などが報告され、地域活性化に件名に取り組んでいる事例が報告された。 また、社団法人ジソウラボの取り組みで一日 2 人の通行人しかいなかった所が 100 人まで増えた町並みを散策した。		
参 加 者	桃木野幸一、和田里志、湯元秀誠、宇都陽一郎		

様式 5

旅費計算書〔実績〕

会派名 (市政クラブ始輝)

内 訳	航空賃	404,000 円	101,000 円×4 名（往復航空券＋宿泊） ホテルパックプラン：南国交通（株）
	鉄道賃	円	
	バス賃等	3,360 円	420 円×4 名×往復（富山空港～富山駅）
	車 賃	円	
	宿泊料	円	2 泊分（ホテルパックに含まれています）
	その他	28,230 円	参加登録料（4 名分）移動費含む ＊分科会会場や現地視察地へは団体バスで移動
合計額		435,590 円	

[illegible]

様式 6

領収書貼付台紙

領 収 書

No. 6810-008367-0003861245-001

発行日：2023年10月24日

ご氏名 始良市議会 市政クラブ始輝

様

¥ 28,230 -

但し 全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま 交流会及び分科会参加費として

株式会社日本旅行ソリューション事業本部

領 収 証

No.434966

市政クラブ始輝 様

2023 年 9 月 26 日

下記の通り領収致しました

合計金額 ¥ 404,000 -

鹿児島県鹿児島市18番地131

南国交通株式会社

電話 099-280-2211

受領者印

摘 要	金 額	備 考
旅行代金	404,000	
消 費 税		発 行 部 所
合 計	404,000	トラベル 本社営業所

領収書貼付台紙

※重ならないように貼付すること。

※レシート（感熱紙）の場合はコピーも貼付すること。

領 収 書		23.10.28 年 月 日
様		
¥ 4 2 0 -		
但し、富山駅前～富山空港間バス運賃 として 上記金額を正に領収いたしました。		富山地方鉄道株式会社 〒930-8636 富山県富山市桜町1丁目1番36号 TEL: (076) 432-3456 FAX: (076) 433-0743 富山地鉄案内所 発行

領 収 書		23.10.28 年 月 日
様		
¥ 4 2 0 -		
但し、富山駅前～富山空港間バス運賃 として 上記金額を正に領収いたしました。		富山地方鉄道株式会社 〒930-8636 富山県富山市桜町1丁目1番36号 TEL: (076) 432-3456 FAX: (076) 433-0743 富山地鉄案内所 発行

領 収 書

富山空港発着バス代金

2023年10月28日(木) 11:37 001号機

¥420-

上記金額を領収いたしました

富山地方鉄道株式会社

領 収 書

富山空港発着バス代金

2023年10月28日(木) 11:38 001号機

¥420-

上記金額を領収いたしました

富山地方鉄道株式会社

領収書貼付台紙

※重ならないように貼付すること。

※レシート（感熱紙）の場合はコピーも貼付すること。

領 収 書		23年10月 日
様		
¥ 4 2 0 -		
但し、富山駅前～富山空港間バス運賃 として 上記金額を正に領収いたしました。		富山地方鉄道株式会社 〒930-8636 富山県富山市桜町1丁目1番36号 TEL: (076) 432-3456 FAX: (076) 433-0743 富山地鉄案内所 発行

領 収 書		23年10月 日
様		
¥ 4 2 0 -		
但し、富山駅前～富山空港間バス運賃 として 上記金額を正に領収いたしました。		富山地方鉄道株式会社 〒930-8636 富山県富山市桜町1丁目1番36号 TEL: (076) 432-3456 FAX: (076) 433-0743 富山地鉄案内所 発行

領 収 書

富山空港発着バス代金

2023年10月26日(木) 13:03 002号機

¥420-

上記金額を領収いたしました

富山地方鉄道株式会社

領 収 書

富山空港発着バス代金

2023年10月26日(木) 13:03 002号機

¥420-

上記金額を領収いたしました

富山地方鉄道株式会社

令和 5 年 11 月 5 日

会 派 名 市政クラブ始輝
報 告 者 宇都 陽一郎

政務活動報告書

次のとおり実施しましたので報告します。

【活動期間】令和5年10月26日（木）～28日（土）

【活動場所】富山県民会館ホール

【目 的】全国の過疎地域の事例発表から考察し、また現地を視察する。

【活動内容】 「全国過疎問題シンポジウム」は毎年持ち回りで開催されており、今年は富山県での開催でした。また、毎年大会趣旨を決め、そのことについての意見交換や事例発表を行っています。今年の大会趣旨は、「多様な人材が創るこれからの地域社会」でした。私の方では、全体会を受講しての内容と所感を報告致します。

1) 基礎講演「過疎地域の使命」、講師：宮口 侗廸（早稲田大学名誉教授）

過疎法とは？

人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域について、総合的かつ計画的な対策を実施するために必要な特別措置を講ずることにより、これらの地域の持続的発展を図り、もって人材の確保及び育成、雇用機会の拡充、住民福祉の向上、地域格差の是正及び美しく風格ある国土の形成に寄与することを目的としています。また、将来の財政負担を軽減するため、元利償還金の7割が後年度に交付税措置されることになっており、市町村は残りの3割を負担すればよいことになっております。

- ・団塊世代の大都市流入から過疎地が出始める。
- ・過疎法は、前例のない法律であり、過疎地域には有り難い制度である。
- ・1990年代は、インフラ整備に活用されていた。
- ・2000年代では、美しい自然のままの状態で存続させる考えへと変わり始める。

- ・大都市での生産の効率化や自由競争の時代ではなくなってきた。
- ・地方へ関心を持つ人が増え、移住する人も増えている。
- ・地域おこし協力隊や地方へ分散する企業が浸透してきている。
- ・地方へ若者の関心が高くなっている。
- ・自然も心も豊かな少数社会を目指す。

2) パネルディスカッション

演題：ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～

- ・「まち歩きマップづくり」から町の特産品や文化などを見つける。
- ・地元住人の目線では気付かないことが、都会の人には新鮮なこと。
- ・地域おこし協力隊などが、人と人とを結び付ける接着剤になる。
- ・次の後継者を育成する。その時に自分たちと同じやり方を押し付けない。
- ・主催者側と同じ年齢層が、イベントに参加している。
- ・ショップを募集する際、具体的な条件を明示して募集する。
- ・最初は小さな輪から始まり、大きな輪へと展開していく。
- ・自分がしたいことをするために移住するのではなく、地元の方々に受け入れられてから、したいことをすると協力してもらえる。

【まとめ】 初めての参加であり、どのような方々が参加するのだろうというのも興味がありました。おそらく一番多かったのは議員、その次に自治体の職員や地域おこし協力隊などの方々でした。内容的には、全国の過疎地域で取り組んでいる事例発表をもとにパネルディスカッションされ、理解しやすく、参考にしやすい発表内容でした。事例発表を聞いていて感じたことは、ここの過疎地域だからできたのではなく、何か変わったことをしているわけでもなく、やるかやらないかの「決心」次第なのではと感じました。始良市でもこれは取り組めるのではという実践を列記します。

- ・その地域の歴史と文化を見聞し、人口が多かった時の街並みをマップにする。
- ・地域の方々の暮らしから残したいものと変えたいものを検証する。
- ・既存の施設を活用して、新たな観光拠点にできないか検証する。
- ・人の往来に必要不可欠な交通アクセスを見直し、新たなシステムを検証する。
- ・自治会活動や校区コミュニティも規模に応じて、抱えている問題が異なる。それぞれの課題を認識して、今後の活動を検証する。

過疎地域に人が集まるようにインフラ整備する過疎対策の時代は終わり、過疎地域の素晴らしさを現存させるために、その地域の暮らしを守ることがこれからの過疎対策だと学ぶ機会となりました。また、始良市においても蒲生地区や他の中山間地区があります、市として人口が増加している今こそ本気で取り組まなければならない過疎問題だと思いました。

政務活動費における活動報告書

令和5年度、当初計画した会派「市政クラブ始輝」による政務活動について、下記のとおり実施しましたのでご報告致します。

尚、報告書はそれぞれ振り分けた担当者で提出しますが、報告内容及び所見等については、会派内で協議し共有されたものです。

- | | |
|--------|---|
| 1 出張地 | 富山県 富山市・朝日町・氷見市・南砺市 |
| 2 出張日時 | 令和5年10月26日(木)～28日(土) |
| 3 用務 | 会派「市政クラブ始輝」 政務活動調査
全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま
10月26日(木) 全体会 基調講演「過疎地域の使命」
27日(金) 分科会(朝日町・氷見市・南砺市) |
| 4 参加者 | 桃木野幸一 湯元 秀誠 宇都陽一郎 和田里志 |
| 5 報告者 | 「市政クラブ始輝」 和田里志 |

【全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま】

- | | |
|-----------|--|
| 10月26日(木) | 全体会 富山県民会館ホール(富山市)
令和5年度過疎地域持続的発見優良事例表彰式
基調講演 「過疎地域の使命」講師 宮口侗廸氏(早稲田大学名誉教授)
パネルディスカッション
ウェルビーイング先進地域～多様な人材が創るこれからの地域社会～ |
| 10月27日(金) | 朝日町 第1分科会 優良事例発表・現地視察
氷見市 第2分科会 優良事例発表・現地視察
南砺市 第3分科会 パネルディスカッション・現地視察 |

主催／総務省、全国過疎問題シンポジウム実行委員会
(富山県、一般社団法人全国過疎地域連盟)、富山県地域振興団体協議会)

● 基調講演 「過疎地域の使命」—日本の価値を高めるために—

講師 宮口侗迪氏（早稲田大学名誉教授）

講演内容の抜粋

- 1、富山での過疎シンポジウム開催の意義大都市圏を除けば、最も過疎地域（朝日町・氷見市・南砺市のみ）の少ない県。
売業資本の水力発電によって、大企業の工場誘致ができ、工業団地方式の先進県で第2次産業従事者比率は1位。
- 2、過疎法の歩み
団塊の世代の大都市流入で存続が危ぶまれる地域が出現。1970年、議員立法で過疎法（償還の7割を地方交付税で補填する前例のない法律）が成立。「過疎地域は単に困っているだけの地域ではない、美しい自然の中の人の営みは都市にない価値を持つ」と過疎地域役割として共通理解を得る。
- 3、過疎法の現代的意義
人口減少と財政力指数を基本的な指標とし、どの市町村も取り残さないという姿勢は世界でも極めて先駆的。国際目標（SDGs）に先立つこと45年。
- 4、過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法成立の意義
「国民の生活に豊かさと潤いを与え、国土の多様性を支えている」
目的 人材の確保及び育成、雇用機会の拡充、住民福祉の向上、地域格差の是正、美しく風格ある国土の形成。
目標 多様な人材を確保し、育成する。
- 5、目標は豊かな少数社会
過疎地域は人口減少を嘆くのではなく、少数の人間が広大な空間と資源を活用する豊かな少数社会をめざすべき。
- 6、大都市にも小さな社会に関心を持つ人が増える
地域おこし協力隊や地域おこし企業人などの制度が定着し、起業や継業が多く生まれ、地方への移住に関心を持つ人が増加。
- 7、豊かな少数社会への道
豊かな自然ももとより過疎地域の価値
- 8、過疎地域の使命
過疎地域が豊かな少数社会に置き換わることが国への最大の貢献。
「日本を隅々までしっかりした暮らしがある国に」これこそ過疎地域の使命。

●第1分科会 朝日町

過疎地域持続的発展優良事例発表会

スペシャルトークセッション

「富山県朝日町発、日本の幸せづくり～一人ひとり住みたい場所に住み続けるために～」

藤野英人氏 （一社）みらいまちラボ合同代表 朝日町特命戦略推進監

畠山洋平氏 朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー

●現地視察（朝日町）

朝日町は富山県の東端、新潟県との県境に位置し、海拔0mヒスイ海岸から標高3,000m級の来たアルプス朝日岳・白馬岳に到る、ダイナミックなパノラマが広がる自然に恵まれた町である。町の最東

に位置する幅 80m・東西約 4 kmの砂利浜は「日本の渚 100 選」「快水浴場 100 選」に選定された美しい円ら都度グリーン of 自然海岸で、ヒスイの原石が海岸に打ち上げられることで有名で近年移住して企業する人も増えている。

○ヒスイ海岸観光交流拠点施設 ヒスイテラス

さまざまなイベントに活用できるホール、テラスや屋上からは輝くヒスイ海岸の眺めを楽しみながら寛げる。

○朝日町立ふるさと美術館

デジタル田園都市国家構想交付金（地方創生拠点整備タイプ）を活用し改修・整備された施設。著名な芸術家による特別展や朝日町にゆかりのある作家の企画展のほか、常設展や個展など、1 年を通して、いつでも美術鑑賞が楽しめる。

《 所見と考察 》

長く総務省過疎問題懇談会座長を務め、富山市在住、「一過疎に打ち克つー先進的な少数社会をめざしてー」などの著書もある宮口侗迪氏（早稲田大学名誉教授）の講演は、説得力があり、地方の発展のあり方について大いに参考になった。また現地調査に行った朝日町は、過疎地域持続的発展優良事例として総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞を受賞した団体だけあって、その取組事例は目を見張るものがあった。過疎を過疎と思わない、誰一人取り残さない地域社会を目指し、自分らしく幸せに生きられることを実感できる基盤が揃っているように感じた。

いずれも富山県や富山市に関係するリーダーたちが中心になって起業している事例が多く、県市のバックアップや人材・企業の育成が進んでいる。

復命書 (政務調査報告書) 市民クラブ 始揮 湯元秀誠 文責

調査事項：全国過疎問題シンポジウム 2023in とやま

日時：2023 年 10 月 26 日 (木) ～28 日 (土)

参加議員： 桃木野幸一・湯元秀誠・和田里志・宇都陽一郎

26 日 13:00 富山県民会館ホール

全体会

開会式

令和 5 年度過疎地域持続的発展優良事例表式

基調講演「過疎地域の使命」 講師：宮口侗迪 (早稲田大学名誉教授)

「都市部が格差や孤独などの社会問題を生み出す中、自然豊かな住環境や一人ひとりに役割と居場所がある過疎地域こそ、日本の新たな豊かさを作り出せる場所だ」と話し、地産地消を軸に独自の経済循環を作ることがカギになると講演されました。

パネルディスカッション

「ウェルビーイング先進地域～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

コーディネーター 指出 一正 氏 『ソトコト』編集長

パネリスト 藤田 とし子 氏 まちとひと 感動のデザイン研究所 代表
金子 知也 氏 (公社) 中越防災安全推進機構にいがたイナカ
レッジ マネージャー

島田 優平 氏 (一社) ジソウラボ 代表理事

佐藤 みどり 氏 NPO 法人立山 クラフト舎 代表理事

- 豊かな自然や農地、森林などを有する過疎地域は、水源の涵養、食料の生産、自然災害の防止といった人々の生活や生産活動を支える公益的役割を担うとともに、ウェルビーイング (自分らしく幸せに生きられること) を実感できるなど『幸せの基盤』が揃っている。

過疎地域に人を呼び込むための方策などが話し合われ、昔から住んでいる人と移り住んだ人との関係づくりを手助けできる人の存在が重要だといった意見が出されていました。

テーマの中では「外部人材」がキーワードになりました。地域が幸せになっていくためには地域の皆さんのモチベーションが上がることも大事であり、そのモチベーションが上がるためには鏡効果として外からやってくる人たちが必要だということの議論がなされた。

27日 9:50 氷見市芸術文化館（氷見市）

○ 第2分科会：過疎地域持続的発展優良事例発表会

総務大臣賞 一般社団法人 筆甫地区振興連絡協議会 [宮城県丸森町]

行政の下請けでも下部組織でもなくて、この組織が自分たちのための組織ということを常に意識づけしながら活動をしている。

人口が減ってく中、そこに住む住民一人一人がいかに主体性を持って地域に関わっていくのかということを大事にしてきました。

私たちの地区でこの当時とったアンケートの中で一番課題があったのが、イノシシなどの獣害が、一番重要度が高くて、満足度が低い位置にありました。

箱罾を50基作り自らイノシシを獲る、というような活動をしている。

住民はこのような問題を今までは行政任せにしてきたことを、自分たちで何かできないかなど日々、地域の中で話し合われるようになった。

農産物の特産品のブランド化の取り組みや、平成30年5月20日に、みんなでお金を出し合い、「ひっぽのお店 ふでいち」というお店を開店させました。

クラウドファンディングなども活用して、大体1400万円ぐらい集めて、この暮らしを守っていくために地域のお店事業をスタートさせています。

また、ガソリンスタンドがなくなることが地域の課題となりガソリンスタンドの事業承継をすることとした。

今では、まちづくりセンターの運営と、お店の運営をしながら、地域全体の中で雇用を作って、そこで暮らす人々の生活を守りたいというような取り組みを行っている。

自分たちでできることは何でも自分たちでチャレンジしようという気持ちで、今地域がどんな状況か。今何が課題で何をしなければいけないのか、など話し合い、取り組みを進めている。そういったことが結局、地域の方々がここに住んでいてよかったという気持ちに繋がるかと思っている。

全国過疎地域連盟会長賞 株式会社ホップジャパン [福島県田村市]

田村市は5町村が合併してできたところで、中通りで一番海側にありますので半分海に近いというようなところです。

そして福島原発から20キロ、30キロ圏内ということで、3年間避難区域に指定され、その間全く人がいなかったという地区であります。

私の企業は、2015年に仙台で起業したのですが、ご縁があり、福島の方でホップ栽培から原料を作ってビールを作るということで、移住して来た。

風評被害の残る都路地区でブルワリーを開くということになったが、私が来た時は、避難指示区域の指定が解除されても年配の方しか帰ってこないというような状況で、活気のないまま町が消滅するのではと不安になった。

復興の拠点、きっかけとなるようななどの思いもあり、ブルワリーをすることになりました。阿武隈高原という標高600メートル以上のところにあり、道もすごく細くて本当に山の中にあったので、焼肉ハウスを作っても人が来なくて、1年ぐらいで閉鎖してしまったという、施設ハードを作ってもソフトがないという典型的なパターンでした。

田村市に合併して、その後震災が起こったということで、もう本当にその時は全く人っ子1人来ないようなところであった。

マイナスの資産をプラスに変えようということで、ブルワリーを作ることにしました。使えなかった焼肉ハウスは、改修してロッジにしました。キャンプ場はリニューアルして、全部ホップガーデンという名前に統一し指定管理として運営しています。

今まで数客しかこなかったキャンプサイトが、クラフトビールが飲めるキャンプ場として人気となり、今では週末はキャンセル待ちになります。

ディスクゴルフは今では全国大会まで行われています。

究極的にこういう理想をやりたいというのは「我々は地球人だ」ということです。こういう大自然の中にある過疎地で大使館を作って、地球人のパスポートを発行するという、そういうムーブメントを作りたいです。

このパスポートの取得条件はたった一つ。この地球にあるすべてのものを自分の家と庭、そして家族として生活します。それだけがこの条件です。

当社は1次産業の原料から2次産業でビールを作り、それを楽しんで6次化する。捨てられる麦の粕は麦畑やホップ畑に肥料として施し、近くの牧場の家畜のえさになることで無駄なく使う。そこで、0次産業化という名前をつけて、これらが循環する姿を会社の理念としています。

総務大臣賞

山古志住民会議／ネオ山古志村（山古志 DAO）
[新潟県長岡市]

新潟県のちょうど真ん中に位置するザ・中山間地域です。山古志は世界有数の豪雪地帯で、例年3メートルから4メートルの雪が降ります。平成の大合併で長岡市に編入合併をして、長岡市山古志地域、人口760人です。

山古志が発祥の地と言われる錦鯉。牛の角突きという独特な文化があります。この牛の角突きの牛たちが、起伏の激しい山古志の田んぼや、畑を耕し、錦鯉が育つ池と牛たちが耕していた棚田・棚池の景観が、日本農業遺産に認定されました。この三つの主な地域資源が山古志にあります。

今から19年前の2004年10月23日に、中越地震という地震が起きました。壊滅的な被害を受け、3年半にわたる全村避難をしています。

この地震の約半年後ですが、平成の大合併で長岡市と市町村合併をしました。

この震災と市町村合併で村の自治体が消滅しました。これを契機に逆に住民主体の地域づくりの機運は高まり、山古志住民会議もこのタイミングで立ち上がりました。自分たちの村は、自分たちの地域は、自分たちで未来を描いて作っていかうということで、設立をしています。

また、震災当時2200人いました山古志住民の方々は、約8割の方が山古志に帰ってきましたが、10数年の時を経て現在は800人を割る状態です。

ここまで住民が減ってきてしまいますと、いろんな課題が山積するようになりました。

2年前から唯一山古志にありました保育園が休園をしています。小中学校の複式化、診療所の機能の縮小、公共交通の撤退、また14の集落が力を合わせて行っていた行事や、村の山の管理でなど共助体制が弱体化しているなど課題が山積みです。

地震以降、学生ボランティアや共感していただいた方々を、住民と同様の仲間として地域づくりの主体者として認めた。その仲間と一緒にこれからの山古志を作っていきたいね、ということで始めたのが、NFTを活用したプロジェクトになります。

山古志の仲間の証であるNFTを発行しています。このNFTをお持ちいただいているデジタル村民の方が約1600人いる。

今後は、山古志住民とデジタル住民の共感コミュニティーの組織化を、法人化を進めていきたい。

全国過疎地域連盟会長賞 論田自治会及び熊無自治会ろんくま移住促進委員会
[富山県氷見市]

氷見市は、能登半島のつけ根、富山県の西部に位置します。この氷見市の中でも西部、石川県との県境に、論(ろん)田地区と熊(くま)無地区という二つの地区があります。頭の文字をとって「ろんくま」というふうに呼んでいます。約200世帯、人口600人で高齢化率は50%ほどである。

人口が15年後、300人にまで落ちると予測される。これから読み取れるのは、20年で300人が15年で300人減り人口減少が加速していることが読み取れる。

こういう人口減少に伴う課題に対して、どう立ち向かうか、ということで、ろんくまは、令和3年に富山県の移住者受け入れモデル地域に認定されて、実行委員会を立ち上げた。

その中でいろいろ話し合いを重ねて、他の地域の事例など勉強をして、1年かけて計画を作成した。「ろんくま移住計画」です。10年後、こんな姿を目指します!というのが三つあって、

一つ目が、子ども達の笑い声が響く村にしよう。

二つ目が、いろんな人が集まって交流する村にしていこう。

人は減っても、1人あたりの負担が少ない村にしていきたいと思います、こういう三つの目標を立てました。

大事なのは、見える化、することだと思います。

何かいろいろイベントをやっているけど、このイベントは何のためにやっているのだろうとか、その目的が見えないと、なかなかモチベーションが上がらなかったり、長続きしなかったりという中で、このイベントの先にはこういった目標があるんだよというものを見える化、していくことが大事である。

他に情報発信として、Facebookの活用。

マスコットキャラクターでの取り組みがあります。

マスコットの、テーマソングまでおじさんたちが作られて、それを地元の小学一年生に歌ってもらってCD化して、それを父兄の方に配って、そこからまたこれかわいいねというようなPRになり、情報発信のすごさがあります。

毎年春に行われている、くまなレウォーキングイベントは、桜や色とりどりの花が咲き深呼吸したくなるような美しい景色の中を、地元が指定した文化財の解説を聞きながら巡ります。

農産物の直売所で「お休み処くまなし」では、皆で収穫を感謝する。くまなし最高のイベント、「味覚祭」が開催される。その中では伝承料理の取り組みもなされている。

若い方たち、女性の方達のまちづくりへの参加、意思決定の場への参加を促す意味でも公式LINEの立ち上げは大事。

地元向けの情報発信ツールはグーグルカレンダーを使って公民館の行事予定を共有でき回覧板も電子回覧板で見られるようになっている。

若い人たちの参加を促していく上でもデジタル技術は取り入れた方が良い。小さな成功 体験を積み重ねて、見える化する、お祝いするということは大事。

地域の取り組みが新聞等で地域の情報発信の記事を読まれて「頑張っているね」と声をかけられたりすると地域への誇りとか愛着心に繋がると考える。

□ 調査からの所感

日本列島の縦断的地方の抱える共通の課題は、ここ数年で危機的状況に陥るであろうと考えられるのが「人口の減少」である。

自治体や集落が急激な人口減少により機能不全化が予想される。地方自治体に迫る喫緊の課題にどう対処していくか、その方程式はだれも解けない事案でなかろうかと考える。

氷見市の発表の中に、人口減少が進む中、どんどん見える化していくこと。自分たちの足元にある大切なものは何か。

資源というものは何なのか、

残していきたいものは何なのか。

ということを絞り込み、焦点を当てていく、そういうことが必要ではないかと現場からの声で話された。全く同感である。

中山間地域の過疎問題に若い世代の参加を促すためには、LINE など、デジタル技術をどんどん取り入れ、慣習的な取り組みなどの抜本的な洗い直しを試みる必要がある。

コミュニティーの運営の省力化などを図りながら、住民の総意形成を図りつつ、過疎に磨きをかける姿勢が地域の存続につながると感じた。

このシンポジウムの事例発表会は、全国の過疎地域を勇気づける内容であり、始良市でも地区取組みの表彰や事例発表のミニ版開催をしてもよいのではと考える。